

窓を開ける

窓を開ければいい
可能性だ

寒い風や嫌なにおいが入ってくる
だが

温かい薫風が入ってくるのだってある。

老いてなお

からだを音声にして言葉を発する
まだ可能性が光っている

怖い事には違いない
老いてなお急ぐこと

生きるとはその勇気をもつこと

ことばの思い出

青い夏

ときには飛魚のように
水面を飛び出して

ことばが跳ねるんだよ

秋から冬へ

老いた海には
ことばが沈んでゆく

底には香ばしく発行する
言葉が溜まってくるんだよ

春の蓬の古希の里

ふるさとに浸りて幾年か
赴いたところで

ことばが水漬くんだよ

用なし人の寡黙に逆らい

なお意地になつて
ことばの覇気をいじる
おわりの季節が
いつ来てもいいように

二つの語法

「資本と言わずお金と言う
労働と言わず働くと言う
そうすると現在が生きていて
生きる意味を裏打ちしてくれる
だがそうしていると未来が閉ざされる
奪われし未来であつていいはずはない
具象はいつしか先を見ず現在の桎梏に
叩頭することになる

だれか

両刀を使い両面を行き来する
言葉の作法に長けているもの
今求められているのはそういう語法だ

わが懺悔文

偉くなることを怖れる礫あり
死して生きむすべなきか児よ
死の床にあれば和らげるかなや児よ
恥多きこと思い出る日
死してなお片づけがたし罪はあり
水子のいのち恐山まで
久方に逢いし女の目の病
恥多きわが片思い知るに至るや
君知らずストーカの如きわが想い
古希を過ぎれば影の如くに
古希過ぎて独りよがりの罪と罰
忘れがたしの汚れ初恋

当て字

水馬をミズスマシと読み

アメンボと俗にいう

水母をクラゲと読み

クラゲは海月とも書く

明治以降にちがいない

道楽を通り越して

秘かないのりが漂っている

海行かば水漬く屍の想い

戦さの時代を遠く過ぎて

なおしつかりと辞書にのこし

水にゆかりの歌人が

秘かに哀悼している

狐の民話

女狐に馬鹿にされた話の定番

汚いを通り越した比喻の観世音

一度はあやかってみたい里山譚

蚯蚓の饅頭

馬糞の饅頭

肥溜の風呂

モノローグ

時には丸坊主になって

一人になって屈辱を味わい

汚れちまった悲しみは

汚れた女の下着への愛着

形を残さない水子の影

自分のことばかり

他律の土地に生まれいで

読者のいない詩のことば
モノローグは詩にならないさ
生きたいばかりに
死のことばかり
詩らしきものを求めて
詩人ではなくなっていく日々

時には丸坊主になって
一人になって後悔を味わい

時を惜しめ
石川啄木のように
一人を抜け出した晩年がある

嵐のなかで身をかがめて
この庭の柔らかな白樺が
ぶっかけそうと
妻がひとりごと